

25 昭和戦前期の精神医療における ジェンダーバイアス

鈴木 晃 仁

精神病患者における男女比にバイアスが見られ、また国や地域によつてそのバイアスが変化することは、歴史研究者によつても注目されてきた。イングランドにおいては、十六〜十七世紀のリチャード・ネイピアの患者においても、十九世紀の精神病院収容患者においても、女性の患者が多い。この現象をめぐつて当時の女性の精神状態に原因を求める議論（マイケル・マクドナルド）や、あるいは女性の狂気が特定の社会問題化されたことに理由を求める議論（エレヌ・シヨウウォーター）などが提出されてきた。精神病患者のジェンダー・バイアスを考察することは、その時代・地域の精神医療の姿だけではなく、社会全体のイデオロギーを読み解く上で興味深い道具の一つとして、歴史の研究者の間で定着しつつあ

る。本発表は、そのような研究動向を年頭に置きながら、戦前期日本の精神医療における患者数のジェンダー・バイアスを概観し、それをどのように解釈すべきか、いくつかの手がかりを示唆する。

日本においては精神病統計が始まった明治後期から太平洋戦争の直前期まで、一貫して女性患者が少ない。また私宅監置、精神病院入院、非監置などの処遇によつて女性の比率が変わつてくるといふ興味深いパターンを示している。特に注目したいのは、どの処遇においても女性の割合が男性よりも小さくなつている中で、私宅監置された女性の割合が特に低いことである。一九〇五年から四〇年までの全国統計を見ると、それぞれの処遇を受けた患者の中の女性の割合は、非監置においては四〇％弱、病院患者においては三五％強であるのに対し、私宅監置患者においては二〇％を下回っている。女性への負のバイアスは、私宅監置において最も強く、非監置において最も弱い。また、どの処遇においても、時間的な推移はほとんど見られず、ほぼ一定していると言つてよい。

一方、地域差を見てみると、ここにも興味深いジェンダー・バイアスのむらが現れている。「衛生局年報」は府

県単位の統計しか教えてくれないが、「地方部」の県と「都市部」の府県を比較したときに、都市部においては、男女の割合が比較的接近してくるのに対し、地方部のほうが、どの処遇においても女性の患者の割合は低い。地方のほうが、精神病患者の負のジェンダー・バイアスが女性により強く掛かってくるのである。東京を扱った警視庁の統計書はさらに精密に市部と郡部における処遇別のジェンダー・バイアスを検証することを可能にするが、予備的な調査では、やはり郡部の方が女性の割合が低い。これらの事実は、さまざまな仕方の説明できるであろう。戦前期日本において精神病の発症率そのものが、男性と女性、都市部と地方部で異なっていた、という説明も可能であろう。そのような可能性も年頭に置きながら、この報告は、家庭の中の力学、特に精神病患者監護法によつて精神医療の中に制度化された家父長制に着目し、都市と地方で家父長制のあり方がどのように違っていたか、その違いが精神医療のジェンダー・バイアスにどの

ように現れたか、という視点に立つて、これらのデータを仮説的に説明することを試みる。

(慶應義塾大学経済学部)